

一日位遅れるかも知れぬが、終りは矢張り二十七日に切り上げるとのことであつた、これで先づ解決が着いて、二人始めて愁眉を開いた。十九日の夜になつて、先生から電報を受け取つた夜二時半頃睡い眼をコスリ乍ら、西に春く残月の淡ひ光を便りに獨り馬場停車場にと向つた。ブラットホームの上に、懐しい師の姿を認めた時、私は犇と懷舊の念に打たれて涙をさへ催した、三年振りに逢つた我師は、相變らず暖いほゝゑみを浮べて、出迎への勞を謝せられた。

いよゝ、八月二十一日は來た、會員諸君は續々會場を集まつて來る、然るに又主催者のマゴックことが出來たと云ふのは、今朝に及んで、突然豫期しない會員が一時に七八名も殖へたことである、夫れが爲めに講話室の机に不足を生じた、實習室も頗る狹隘を感じて來た、次の日も又次の日も、會員が殖へた、第四日目には五十七名の多數に達した。吾等主催者はこの盛況に言ふべからざる満足を感じた。終に楽しい一週間は愉快に過ぎて最終の日となつた、日毎く膳所町民の注意を牽いた、長方形の箱を擔いで、皮の着いた三本足の腰掛けを持つた自然の讚美者は、今日限りこの町から見ることが出來ないと思へば、染々と寂しい想が湧いて來たさりながらこの一週間に於ける先生の熱心なる御指導には、何時もながら感謝の外はなかつた、次で會員諸君が吾等の不行届をも御不平なく、能く圓滿な一週間を終ることを得せしめられたのは深く謝する次第である。私は最終の日陳列された諸君の一週間に於ける成績品を見て、フ

ト第一回の青梅講習會の時を思い出した、あの時分の成績と比べると、實に霄壤の差である、あの時分には丸て兒戯に類するものがあつたが、今日のは實にアマチュアと思はれない堂々たる作品ばかりである。私は洋書趣味の甚しい進歩に、且つ驚き且つ欣ぶと共に、又青梅時代から今日の進歩に與つて力ある先生の前に、多大の敬意を拂はざるを得なかつた。この日午後の互別會は空前の盛況であつた、私は不幸にして俄然發病した爲めに、列席し得なかつたが、それでも隣室で氷を抱きながら、この盛況を聞いて居た。隣りに寝てる私にはよくは別らぬが、それでも動物の假音や、口上使ひを聞いた時には、齒を喰ひしばつて獨り笑つて居た、これがホントの泣き笑いだらうとツクく思つた。餘興の演ぜられる度毎、親しげな笑ひ聲や拍子の音がドツと起る、私はこの盛んな狀況を耳にして、苦しい中にも言ふべからざる嬉しきを感じた、そして口の中で幽かに諸君の萬歳を稱へて居た。かくて思い出多き講習會は終つたのである。(九月十四日)

■十月二十三日附にて、差出人の名も所もなく、また消印の差出局名不明のハガキを出された方は重ねて姓名御通知を乞ふ。

\*

\*

\*

\*